



第三章 「ウメノミニアラズ」

1

「……冬は鍋物が好き」

「鍋はいいですね。一度に沢山食材を処理できますし、味付けが大雑把でもさほど気になりませんし。なにより季節柄、温まるのが良いです」

「私も数々の鍋料理を左ノのお蔭で舌で味わい、胃に納めてきたものね」

「まあ、この組に来てからは、大勢で囲む時は当たり分がたかが知れていますがね」

「でも、昔よりも色々な種類の鍋物を食べさせてくれるじゃない、左ノ」

「ええ、まあ、食材の管理が自由が利きますからね、昔は旅暮らしのようなモノでしたしね」

「……………そうね」

「……改めて知りましたが、関東ならではの鍋料理が結構ありますからね。ドジョウの鍋料理である柳川鍋とか、アンコウ鍋もおいしいですし、馬肉を使うさくら鍋なんてのもオツですよ、姉さん」

「うん。この一年で私の食生活は大変豊かになったわ」

「……その分、もともとの食い意地が更に磨きがかかった気もしますが……」

「なに……!?!」

「いえ、なにも。食のこだわりが出来ることは、生きることを豊かにするのかなー、なんて、ですね。いや、生きることに余裕が出来るから、食のこだわりの余地があるのか、この場合どちらでしょうね」

「こだわり……か。ねえ、左ノ」

「はい、なんですか？」

「私は、こだわってもいいんだろうか。私は 『心』 を持ってから、色々な事を考えてしまうけれど、その心の働きは、時に卑しいモノのような気がする」

「そうですか？ けれど、皆そんなものだと思いますが」

「……ううん、でもね、あれからしばらく考えて、また時間も経ったけれどね、私の心に差した影のようなモノが、この『心』と『刀』を、どこか曇らせているような気がして、ね……」

「それは……」

「ねえ、左ノ。それでも私は、人の『心』を……想うということにこだわってもいいのかな……？」

左馬ノ介は答えなかった。

彼の内に、雪絵のこの問いに対する適切な答えがなかったからなのか、それともこれも、雪絵の漸悟を……時間が掛かったとしても自ら得る成長を待つところが採らせた、彼の賢明なる沈黙であったのか、それは定かではない。

時に、北風が獅士堂邸の庭木を揺さぶる午後。

見上げる空はどんよりと雲が低くたちこめ、肌を通る空気は刺すように冷たく、冬の本番をその身に実感させる。

衣更月の名のとおり、着物も厚く着込む季節に、しかしそんな季節の様子に反するような、年中変わらぬ稽古着で、寒風のなか木刀を手に鍛錬を積む侠達。

寒中熱心。

例え寒い季節であろうとも、熱意ある人は自ら好んで趣興し、その心も躰さえもが熱を帯び、寒さなど感じないという。

多くの侠達も、自らの刀技の研鑽という意欲が、凍える身を――心を、字の通りに熱く焚きつけるのだろう。

顔も耳も、首も手先も、着物から露出し風に触れる部分はほんのりと紅潮し、汗ばんでいる。そのスガタは一刻、一刻半の稽古を経てまさに身心が熱している様を如実に感じさせる。

素振り千本を終えた者達で、組太刀試合を行っている。その輪の外で、監督役の白峰に向けて、左馬ノ介は珍しく彼と話を構える。いつかの時間に、雪絵とそんな遣り取りをした話を。

顎をさすりながら、白峰は思う。

襲ね菊の武侠――あの一戦以来、雪絵はあまり狩りに行きたがらないと思っ

第三章 太刀の壱

ていたが、どうやらその太刀合いで、彼女は心に禍根を持ったようだ、と白峰は察していた。実際には雪絵なりに考える時間を持たせることが、白峰や春花の変わらぬ方針だ。いつ斬り果てるとも知れない武俠の生業で、悠長にも感じるかもしれないが、そういう武俠の生だからこそ、己が煩悶と真摯に向き合うことが必要だと、白峰は若い者達にそれとなく促していることだった。

しかし、そんな自らの器量を磨くことを課されている雪絵が、それを自覚しているかどうかはともかく、左馬ノ介に自らの悩みを口にした。そう、相談してきたということは、答えに窮したということか、と白峰は考える。

「しかし、心にこだわっても良いのか、か.....」

「.....ちょっと、真面目に考え過ぎな気もするんですがね」

「心配なのは分からんでもないが.....しかし、悩んでいるところの、その殻を破った時ほど人は何者かに成長の一步を刻むものだ」

「そうですかね。それでも、直接答えを与えなくても、助けになりたいと思いますよ」

「そうか。ならば.....考えてやればいいだろう。例えば.....今の雪は捉われておるようだな。『心』が生じさせるモノに、惑っておるようだ。だが、その事自体は武刃者の精神修養よ。大いに悩んで是だとは思わんか」

「悩むのも考えるのも、しんどいけれど、何も考えないよりよっぽどイイから、是とできると、姉さんは思っているとみますよ。考え悩むのが厭わしいなら、とっくに思慮なく刀を振るう方向に気持ちが向いている筈ですから。ただ、答えが見つからないのが、座りが悪いというか.....もどかしいんじゃないかと」

一人分の距離をおいて立つ左馬ノ介に、白峰は正面を見て会話する。

「そうだな。悩むのは苦しいことだが、それが何のためかという事をちゃんと理解しているのだろう。だから、その悩み惑うということは、それ自体も悪い事ではないとして、雪は自らに課している」

「はい」

「お前に説く必要があるかどうかはわからんが、人やモノや事という様々な道理を知っていくとな、知識と意識が増すと、人は太刀合いにおいても自ずと相対する『人』を視てしまう。太刀合う者の『心』を捉えてしまう」

「……この場合は、あの武俠」

あの武俠——襲ね菊の武俠との太刀合いの最中に感じた 『彼』 を、雪絵は刻銘に捉え、心に残している。

「だがそれは、重荷ではない筈だ。武俠であるのならばな。人でありながら、他の命を斬り殺す業の者でもある武俠ならば、その精神として斬る相手を知るとは、尊いことだ」

「武俠の在り方……ですね」

「うむ、あたら命を粗末に扱う者は、人ではないのは、この世の倣いよな。しかし、我らはこの郷に在る者として刀を手にした以上、人を斬らずには済ませられん。だがな、それと人の命を軽んずることは、断じて相容れん」

それは、今その話を聞いていない雪絵にも、道理としてすっと胸に納まることである気がする。心無く人を斬る行為が、何を生じさせ、何を殺すのかを雪絵は身を持って知っている。だからこそ、刀を振るう事を止めないとしても、斬るときにはこころしなくてはいけない事を学んでいた。

考えるようにこめかみに指を添える左馬ノ介に、白峰は話を続ける。

「しかし、時に人は相手の命と心……想いを捉えるあまり、自らの心も捉われる状態になることがある。今の雪絵はそれやもな」

正にそうだ、と左馬ノ介は義姉の横顔を思い出す。

「……姉さんは、あの武俠の心と想いに触れて、彼に尊意を感じた。彼の想いという意を、尊いモノと感じた。それでも、斬ってしまったことに悔いはない。けれど、姉さんは……彼を斬る理由に、彼の心の在り方を蔑んだと言っていました」

「ほう……」

昨年秋以降、『狩り』 に積極的に加わろうとせず、会合の席にも行き渋り、白峰との座禅も回数が減り、相談もしてこなかった雪絵。それは、自らのこころの有り様に、僅かながらの恥じ入るところがあったからなのか、と白峰は得心する。そういうことならば、極々親しい仲の左馬ノ介に打ち明けたのも納得できる。

そして、その左馬ノ介は行動判断が迅速で迷いが無い。自分の思慮と器量に

あまると判断できたならば、有力な人物の助力を即座に仰ぐ。

この歳ですでにかなりの実力者である左馬ノ介が、そうも自らのプライドを意に介さない理由は明白だ。それが雪絵のためになるのならばと彼が思っているからだ。左馬ノ介の行動は、ほとんどそれに支えられていることを、彼をよく視る周囲の人間は理解していた。

その自らは二の次にする姿勢が、至誠を持っていることに、白峰も力を貸しやる事をしたくなる。それに、もう一年以上、同じ釜の飯を喰い、しかもその約4分の1は左馬ノ介の手が入った料理である。この獅士堂一家の組員にとって、織田左馬ノ介はもはや、極々近い身内なのだ。

「姉さんは、彼を気高い武俠だと思えたことで、彼を斬る意が鈍った。もしかして、生まれて初めて、人を斬ることに躊躇いを憶えたかもしれないですね。でも姉さんは.....武俠の生業とは、そんな感傷は甘いモノな筈だとも思っているようです」

広い庭で木刀を振るう、四十、五十という同じ生業の俠達。そこに、雪絵の姿も混じっている。袴姿の彼女の、束ねた長い黒髪が冷え冷えとした風に揺れている。

「そんなところだった姉さんが採ったのは、彼の『弱さ』を怒る想いに身を任せることだった。姉さん自身は何故、人の弱さに怒りを覚えるのかまでは、まだ理解していないそうですが.....それでも、気高い武俠を蔑んだことで、姉さんは獅士堂の太刀の“静かな心”に反してしまったと感じているようです」

「む.....」

「これは俺も考えるんですが、“静かな心”は、相手を知ることによって生じる内なるモノを抑えなければ、人を斬る事に自分が傷つくから必要なのかと思います。『人間』だと、どうしても殺すことに心が揺らぎますし。だから獅士堂の太刀のころは、刀に生きる道を歩み続けるために、なくてはならないモノなんだと。姉さんもうっすらと分かってはいると思います」

左馬ノ介は組太刀試合をする雪絵を視て、「でも.....それは、どこか自分

第三章 太刀の壱

本意でもある気がしますよね」 と付け加えた。

「お前も……雪も、それが納得いかんのか」

「刀を振るうのは、誰もが自分の意思だと姉さんも分かっています。でも、人を斬ることは、相手の全てを斬り捨てる行為です。思うに、そこにあるべき心は、本当に“静かなモノ” でなければいけない場合もあると思います。心無く斬ることも愚かですが、悪意や激情で斬るのも同様に醜悪だと考えられます」

それは、人の命に対して 『礼』 や尊敬の念を逸した姿勢だと、雪絵は漠と理解していた。

左馬ノ介にとっては、武侠のころであるそれらを理解するのと並行して、彼自身としては、『人を介ける』 ことにそのころが沿うから是としているところがあるのだが、それは彼も語ることはないと思っている。

白峰は言う。

「その時の雪は、醜悪だったと……だからそんな自分を大切にしていれば、ということであれは悩んでいるということか？」

沈黙を以って応える左馬ノ介。

菊の精気に当てられたか、などと思う白峰だったが、何のことは無い、雪絵が当てられて、魅せられているのは坂本春花という女侠——その精神であり在り方だ。

しかし、雪絵が春花に憧れを抱くのはいいが、このところの彼女は其所為で自らの刀を……そして心を曇らせている。

(平たく言えば、人を斬ることを高潔に考えすぎだ。想いを重んじる、という教えはあの娘にそう作用したか……)

もちろん、雪絵の考え方や姿勢というモノは悪くない。人間としての心を感じる、尊さを持っている。

人の命を斬ることを、命への感慨も意志性もなく行う人間など、ただの人殺しであり、畜生以下の下衆だ。生き残る術に長けた白峰であっても、太刀合いはそのころを失うべきではないと、そう考えている。長年に渡り刀で生きて

第三章 太刀の壱

きて、そうした“心を逸した者”も数多く視て来たからこそ、当然のようにそう心得ている。

だが、今の場合は一―彼女の場合はそれが度を過ぎ、雪絵が自ら言ったように刀と心を曇らせる事態を引き起こしている。

(若いうちには、こじらせる事もあるものだが.....)

と白峰は苦慮する。

(春花は、雪が自ら乗り越えるべきと多くを言わず、何も急かしはしない。しかし、ときに羽化には切っ掛けがあるものだ.....。幼い者ならば特にな)

まだ幼い雪絵ならば、もしかしたらこれを機に、刀から離れた生を歩めるのではないか、と白峰は頭の隅で思う。.....そして同時に、彼女のこれまでの業と、そして刀技の輝かしい才をこんなところで潰えさせるべきではないという、多くの刀遣いを視て、育ててきた白峰ならではの想いが浮かぶ。

そのどれが正しいかといえば、やはり、白峰や第三者の思いではなく、当事者一―雪絵自身が望んでいることか否かなのだろう。

だから、これまでのように自分の識る言葉を、雪絵という一家の家族に贈りたいと白峰は思うのだ。

「立ちはだかる存在が『壁』ならば、対立する者やその意志は『石』だ。己が生において、人は道を阻む石を取り除かなければ進めないことが多々ある」

「.....また白峰さんは、一見して分かり難いことを言うんですから。それを俺が姉さんに伝えるんですか」

「取り除くとは、能動的であり、自らの意思による行為だ。そこに相手への尊意を抱いたとしても、自らの『意』も厳然としてある」

「.....自らの『意』.....ですか」

動じない白峰に、左馬ノ介は頬を掻きながらもその言葉の意味を考える。

遠く、メジロが数羽、空を舞う。チーチーと鳴き合い、やがて侠の庭の木の枝にとまる。

見ると、稽古の合間の雪絵が、その白く円いつぶらな眼と、黄色の首巻のような色合いを見つめている。

第三章 太刀の壱

「そして、人を斬ることは咎を負う道だ。そしてそれは、哀しいことだ。ならばだからこそ、刀を振るうには、強い心が必要だ。己は己である——自らの『意』は厳然と強固にあるという意志がな。分かるか？」

「強い意志……姉さんに、自身を持たせると」

この言葉を雪絵が聴いたのならば、彼女は自らの心に差した影とは、自分があの武俠に感じたそのモノではなかったか、と——多分そういう事かもしれない、と思う気が、左馬ノ介はした。

「自身であり、自信かもしれん」

自信ですか、と左馬ノ介ぼつりと漏らす。

小さく笑って、白峰は左馬ノ介に言った。きっと彼女は順序を間違っただけだろう、と言う。

「薄く弱い雛鳥は何も知らん。己のことすらな。まずは己を大切に、己の価値を知ることよ。誰かにそう思って貰えとな、人は自らを大切に出来るようになる。そしてそれを心強く感じて、前に進める」

「ふむ……味方を感じることでしょかね」

「今もいるが、それを雪がしっかりと認識することで、自らに心強さを得られるやもしれん」

「はあ、それは一計の価値ありですね」

「あれは、まだ人は弱いモノだということを知らん。自分が支えられていることもな。それに気づき、自分の内にもある弱さを、それを認めどうするかが肝要かもしれんよ」

「その為に、周囲にある人の想いに気付かせることもあっていいかもしれない、と……」

「……まあ、焦ることはない。既にそういう者がおるだろうしな。ゆるりとその身に感じられればいいのではないか」

「また白峰さんの『焦ることはない』ですか。姉さんは結構じれったい思いもあるようですよ」

「むう……」

「……でも、そうですね」

見ると、雪絵は手隙の狭に自ら声をかけ、また組太刀試合を始めた。

そんな冬の庭の風景の片隅で、小さなつぼみをつけ始めた木の枝で、メジロが花蜜を早く吸いたいというようにキョロキョロと首を回し、鳴き合った。

ウメのつぼみはまだ、凍えて固まっているようだ。

2

「いやあ、参ったね今日は。本当、困ったもんだ」

そんな言葉とは裏腹に、機嫌が良さそうにお気に入りのストールを首に巻いていじりながら話すのは仁美だ。つい今迄、手に持っていたレンゲは皿に置かれている。

「そうねえ、こんなことってあるのねえ。近年はこんなに積もることはなかったけれど」

応じるのは春花。箸をおいて、熱燗を笑顔で呑んでいる。

「でも、お蔭でこうして美味しいモノにありつけた。大人数だとこうはいかない……怪我のこーみよーだよ」

残り汁で作ったおじやの、鍋の底をさらえたおかわりをはふはふと食べながら、雪絵が上気した顔で言った。

雪絵に春花、そして仁美が現在居るのは、獅士堂邸の本邸とは別に三つある、離れの住居棟の一つ。主に春花の居室や雪絵の部屋、左馬ノ介と離れの管理をする女中、中間が詰める部屋がある棟だ。

その離れの来客用の座敷で、堀炬燵に足を突っ込んで、三人は卓を囲んでいたのだった。

彼女たちは、本邸の狭達に供される夕食とは別に用意された、品目が多彩なお客様向けの鍋をつついていたのだ。

仁美が困ったものだといいながら、その実、現状を楽しんでいる表情なのは、こうして女子水入らずで食事の席を囲むことが、実のところこれまでなかった

からだ。春花と雪絵との親交のひとつとして、密かに何かしたいと思い続けていた仁美としては、思いがけずそれが叶い、困った状況でありながらも、元々の威勢の良さも助けて機嫌の良い顔にもなろうという訳である。

しかし、仁美が陥った状況とは、春花と雪絵たちと食卓を共にする事かという、本筋はもちろん違う。

普段は仁美がこの郷にいて、獅士堂邸を訪れ、雪絵と遊び、春花に近況を報告し、組の男衆に混じって刀技の鍛錬をするにしても、彼女は基本、屋敷に長居はしない。大抵は、夕刻の食事時になる前の、外回りの任に就いている俠達が多く帰邸する頃には、拠点としている内藤新宿や板橋宿などに帰っていく。それが仁美の来訪スタイルだ。

それが今日は、もう日も暮れて、皆が夕食も済ませた時刻になってもこうしてのんびりと卓を囲んでいるのは一体何故かというところ——まあ、ありていに言って『帰れないから』である。

関東、本日昼過ぎから突然の大雪。

十四時過ぎの時点では、まあ大丈夫だろうと油断していたら、それから一刻が過ぎるくらいにいざ帰ろうかという頃には、馬車が走れない程に雪は路面に積り、辺り一面が銀世界であった。

しかも外は季節柄の風が強く、歩いて十キロメートル以上を常宿まで戻るとはままならない有り様。

というわけで、お泊りだった。

決まってしまうえば、大らかに状況を楽しむ仁美である。雪絵と春花も誘い、離れの客間でしっぽり女子のみで鍋パーティーを催し、親睦を深めていたという訳である。

本降りの時間に比べて僅かに緩んだとはいえ、現在も雪は降り続けている。雪絵たちのいる離れの棟は——いや、それだけではなく、獅士堂の古色蒼然とした屋敷とその広大な敷地も、一面に渡り足跡一つ見えない白銀の地場となっている。雪しずりの音だけが、しんとした夜の中にときおり聴こえる。仁美はそんな表の様子に耳を澄ませながら、しかし、ほうと漏らす。

第三章 太刀の壱

「冬はやっぱり、炬燵ねえ」

卓の布団に腕を突っ込んだままに、雪絵が首を巡らせて応じる。

「うん、ぬくいぬくい」

「まあ、これだけ冬も本番だと、確かに暖をとりたい気持ちにはなるけれど、組員達が多いから、皆が同じように楽しめるモノじゃないのよ。もう少ししまりを持ちなさい、二人とも」

そんな風にたしなめる春花は、熱爛で身が温まっているのか、その声はいつも以上に優しい。

「おこられてやんのー」

「むー、雪がこんなに積もっている時くらいは、少しはいいじゃない。あの毛玉の猫だってぬくぬくしたいよ。のんびりするよ」

「もう……、でも、それもそうね。この炬燵というのは、お布団に並ぶ魔性を秘めているから」

そういう点でも、やっぱり気構えは大事なのよ。と春花。

「はは、魔性って、春花さん……」

仁美はまた自前の薄い黄色のストールをいじり、息を吐いて笑う。

それを横目に、雪絵は『仁美は首巻がお気に入りなんだなあ』と改めて思う。今日、来訪した時から目を引いたのだが、『その首巻似合うね』と言うと『ストールだ』と強く訂正されたりもしたのが記憶に残っている。

その仁美は、そういえば、と手を打つ。

「西方でね、少し前に新しい型の炬燵が発売されたんですよ」

「ふうん。炬燵に新しいも古いもあるの？」

「どんなモノかしら？」

話を継ぐにしても受け答えがあるだろう、と母娘の違いを感じながら、それでもあまり気にせずに仁美は続ける。

「それがですね、電気炬燵なんですけれど……まあ、電気炬燵って割と昔からあるといえばあるんですが、今回は熱源が床置き式じゃあないんです。床置き式ってわかりますよね？」

第三章 太刀の壱

そう言われて、雪絵と春花は頭の中でその『床置き式』の炬燵のカタチを想像する。熱源を床に置くのだから、掘炬燵みたいに卓の足元がへこんでいない平床に、その上に木枠で安全に固めた火鉢などを置くようにして、そこに卓と布団を重ねる、のような、常設しない片づけも出来る据え置き型のイメージを二人は思い描く。

ふむ、と雪絵と春花は頷いて先を促す。

「で、今回はね、電気やぐら炬燵、っていうのが出たの。これはね、熱源が机の卓下部に付いていて、何と炬燵布団に入って寝転んで足を自由に、気兼ねなく伸ばせるらしいんだよ！」

若干勢い込んで話す仁美に、聴き手二人は一旦静かになる。

そして、再度脳内でその炬燵の構造を思い描いてみる。

温かい炬燵で、熱源を気にしないで、横になって全身を伸ばしている自分を想像する……。

「……………」

「……………」

顔を見合わせる雪絵と春花。

春花が口を開いた。

「それは……更なる魔性ね！　きっとバカ売れするわ。大人気間違いなしよ」

「寝転んで足も気兼ねなく伸ばせてぬくぬくは、それはまずいでしょ。私も気構えが大事になると思う……」

雪絵がこれまでに見せた事のない深刻な顔でつぶやいた。

「あはは、分かってくれた？」

温かい酒を舐めて、春花が雪絵を視る。

「そういえば、西方といえば、新しいモノが他にも出回り始めたそうじゃない」

「あー、昼間に雪絵にあげたアレですか」

「私にもくれてありがとうね、仁美ちゃん。でも、チョコレートなんて本のなかでしか知らなかったから、私も嬉しいわ」

そう言って笑う春花の顔は、ほんのり朱が指していて、年齢以上に若く見え、

可愛げがあった。

「私は名前も初めて聞いたよ。……これね」

と、客間の脇の盆に載せられていた、白い包装紙に包まれた箱をとった雪絵。

「おいおい、食後だろう。それ、お菓子だぞ」

割と丁寧に包装紙をほどいていく雪絵に仁美が言うと、春花は、

「私も夕方に少しいただいたけれど、チョコンとしたお菓子だから、少しつまむくらい問題ないわよ」

と言った。箱を開いた雪絵は、その言葉を裏付けるような内容物のカタチに頷く。

「ふむ……、これは確かにチョコンとしているね」

包みの箱を開けたそれ——仁美から贈られたチョコレートは、個々の粒が小さいながらも、優雅なカタチとデコレーションでコントラストがつき、華やかだ。

しかし、そのお菓子をつまんで見つめ、雪絵は言う。口がへの字に歪んでいる。

「何か……黒いんだけど、これ体に悪いとかじゃないんだよね……？」

まあ、私も毒耐性のある躰だけど、と雪絵。

「お前、失礼だな雪絵！ ……まったく。大丈夫ですよ、春花さん」

「ええ、雪絵、食べてみれば分かるけれど美味しいわよ。悪魔のような、魔性の味よ……」

ふふふ、と目を細めて笑う春花に、雪絵は青ざめる。仁美が手を叩いて笑い声をあげた。

「あはは！ 春花さん、それ面白いっ ていうか雪絵が面白い！」

「ふふ、冗談よ。まあ、食べてみれば、雪絵」

釈然としない、という可愛くない顔をしながらも、手をずずいと前に差し出して促す二人に、雪絵はつまんだチョコレートなるモノを、それでも矯めつ眇めつ視て、匂いをかいでみたりする。

警戒色全開である。

第三章 太刀の壱

それでも春花と仁美が、早く食べろ、と眼で訴えるので意を決して黒い塊を口に放り込んだ。

「—————!?!」

思わず目を見開いた。オーバーアクションに乏しい雪絵にしては、珍しく大きな反応といえる、見た目で反応が分かる顔だった。

咀嚼すると、これまで味わったことのない、未知のコクのある香りが口に拡がり、鼻に通る。更に固形が口の中でゆるりと溶けて、舌の上でどろりとした旨味がまとわりつく。それはねっとりつつつ、どこか甘美だ。まずは、歯に硬い、コロコロとした歯ごたえを感じていたのに……更に噛んでみる。舌で弄んで味わっていく。

「……………ん——っ」

もむもむと口の中で噛まれ、砕けるチョコレートは、溶けるほどに味わいを拡げ、口にまろく苦くひろがる。

「どう？」

二人が顔を寄せて雪絵を視る。

「甘くて……コクがあって、とろけるとろける。それに少し苦いのがイイ。…
…イイね、これ。イイようっ」

続けてもう一つの塊に手を伸ばして、雪絵が言う。

その黒い瞳は星を蒔いたようにキラキラと輝き、暖をとっているからではないのだろう、頬が紅潮していた。

「うえっへっへ、イイ反応、あーりがとーう！ どう、本当にイイでしょう」
してやったり、と仁美は指を打ち鳴らした。

楽しそうに春花が微笑んだ。

「でも、西方も面白い商売を思いついたものよね。二月十四日にチョコレイトを贈る習慣を作ろうなんて。西欧の倣いでしょう」

「ま、面白いっちゃ面白いんだけど、お祝い事にかこつけて商売するのは、どこでも正攻法ですよ。気にし過ぎることもないという事なんではないですかね」

楽しげにやいんじやないですか？ と快活に笑う仁美。

カリコリもむもむとチョコをまた一個と幸せそうに頬張る雪絵は、ふと話に

第三章 太刀の壱

加わる。

「習慣とかお祝いとか、何の事？ 西方ではチョコレイトを何のために贈るの？」

その問いに、春花と仁美は顔を見合わせる。

何か変なことを訊いたかな？ と雪絵が沈黙を受けとめる。

そして、仁美から貰ったチョコの三分の一を食べて、残りはまた後で、と箱を閉じて上に包装紙をかぶせて、脇の盆に置いた。

「雪絵、あのね。それは本当に大切なことなんだ」

「？」

「そうね。本来は、異性間での行事ととるべきなんだろうけれど、人と人……同性間でも、意義はしっかりとあると思うわ。変な意味じゃなくてね」

「？ ……つまり、何？」

ニヤリ、と笑う春花と仁美。

そのとろけるチョコレイトのような笑みは、どこか魔性を感じなくもない。

二人は言う。

「……“愛の誓い” として贈るんだって！」

「……………」

その言葉を反芻し、咀嚼して、雪絵は思う。

確かにそれは、魔性であると。

……続く。